

福島大教育 乗原澄子

目的 安土桃山時代から江戸時代までの、武家の男子は、どのような衣服の種類を用いていたか。それらの衣服の名称や形態・地質・各部の寸法・縫いかた、その他は、どのようなであったか。また、その変遷はどうであったかなどを調べるため。

方法 久能山東照宮にある徳川家の遺品類(家康から慶喜に至る15代、265年間)の、男子が用いられたと云われている衣服類60余点を調査対象とし(1次報告をする)。

結果 徳川歴代の將軍達が、公式時に用いられたと思われる装束類の生地は、鎌倉末期の製作と考えられる鶴岡八幡宮の装束類や、室町時代の製作と考えられる熊野速玉大社・阿須賀神社・熱田神宮の御神服類と大差はないが、文様は明らかに桃山期・江戸期の特色を現わしたものであった。形態は、一見相違なくみえるが、部分的には各所に簡略化された点が見出された。日常着や武装時の衣服には、地質や形態のうえにも、従来のような中国や韓国の影響以外に、ポルトガル・オランダなどの影響を受けたと思われる点が見受けられた。また、地質・材質・縫製のうえにも、鎌倉・室町時代の遺品類にみられない、非常に厚手の錦や、緞子、麻類・木綿類が多く用いられ。縫いかたも、わづか265年間でも、初頭と末期とは相違な裏りがみえ、末期のものは現代の縫糸や、縫製方法に非常に近いものがあった。